大淵の雨ふり山

平成六年九月五日号

大淵の大坂に「雨ふり山」と言われているところがあります。この山へ入った者は、雨に降られて逃げ帰ってくることが多く、村の人々からいつからともなく「雨ふり山」と呼ばれるようになったということです。

今回は、大淵第二小の「富士本（ふじもと）みどりの少年団」に案内してもらいました。

ある秋の日のこと、一人の若者がまきを取りに山の中へ入っていきました。仕事を始めると間もなく、今まで晴れていた空が急に黒雲に覆われて、雨が降ってきました。若者は仕方なく帰ろうとすると、雨はピタリとやんで青空が見えてきました。そこで再び仕事に取りかかると、また大粒の雨が前より一層ひどく降り出しました。若者は、「変だなぁ」と言いながら道具を片づけると、また日が差してきました。

気味が悪くなりましたが、せっかく来たのだからと、仕事にかかりました。すると、今度は雷と大雨が一緒にやってきました。若者は顔色を変えて村へ逃げ帰りました。

この話を聞いた村の人たちは、

「そんなばかなことが…今まで聞いたこともない」

と言って笑いました。

しかし、その後も村人たちがこの山に来るたびに、大雨に降られて逃げ帰ったので、いつしかここを「雨ふり山」と呼ぶようになりました。

▲ 雨ふり山

「富士本みどりの少年団」

渡辺美幸さん、渡辺ゆかりさん、石川奈々美さん、岩間知恵子さん

大淵第二小の生徒は、全員が富士本みどりの少年団。十年ほど前の先輩たちが、「雨ふり山」の言い伝えを書いた看板を現地に立てました。

「雨ふり山の話を知ったのは去年のこと。初めて来たときは、最初から雨が降っていた」

「この言い伝えは、やたらに山へ入って木を切ったり、ごみを捨てたりして、緑を大切にしないと山の神様が怒るよ、という意味があるんだと思う」と話していました。

ちなみに取材のときは、残念ながら（？）雨は降りませんでした。